



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

トルコ：反政府デモの発生 (2)

(6月12日～14日報道取り纏め)

トルコでの反政府デモは収束する兆しが見えてこない。

6月11日、エルドアン首相は「我慢の限界だ」として警察隊を投入、催涙ガス噴射や放水を行い、一部のデモ隊と警察隊が激しく衝突した。直前にはデモ隊代表者との会談を示唆していただけに、強硬姿勢が新たな反発を招きかねないと懸念されている。

現地時間の6月12日(水)、16時から始まったエルドアン首相とデモ代表者との会談は、ムアッメル・ギュレル内務大臣、オメル・チェリキ文化観光大臣、エルドアン・バイラクタル環境都市整備大臣、フセイン・チェリキ AKP 副党首らも同席し、約5時間にわたって行われた。

デモ隊の代表者として会談に参加したのは11名だった。(Ahmet Mümtaz Taylan (俳優)、Betül Tanbay (学者)、Hale Çıracı (学者)、Kutluğ Ataman (アーティスト)、Nil Eyüboğlu (学生)、Rumeysa Kiger (フリージャーナリスト)、Selva Gürdoğan (建築家)、Zehra Öney (ソーシャルメディアスペシャリスト)、Zülfikar Kürüm (出版関係者)、İpek Akpınar (学者)、Bülent Peker (AKP 党员)) 彼らは公園の再開発撤回、エルドアン首相のイスラーム主義的な政治手法の見直し、首相の退陣を求めたのに対し、エルドアン首相は公園の再開発を問う住民投票を実施する事を検討すると述べた。しかしながら、デモ隊が主張していたエルドアン政権の強権的な政治手法や首相自身の退陣には触れず、あくまで強気な姿勢を崩していない。また、今回首相と面会したデモ隊の代表者の中には、70以上の団体が連携して設立された組織の代表者は含まれておらず、本当の意味での「代表者」だったのかについては疑問視されていた。

一夜明けた13日(木)、首相は公園でテント生活を送っている人々に対し24時間以内に公園内から立ち退くよう求め、応じない場合には強制排除も辞さない構えを見せたが、同夜、再度デモ隊の代表者と会談を行うことを表明、1回目の会談に参加できなかったメンバーも交え会談が行われた(詳細については次号)。

今回のデモでは、5名が死亡、負傷者も5,000名を超えたことから、エルドアン首相の対応に国際社会からの批判も高まっている。首相自身の支持率低下の懸念だけでなく、オリンピック誘致やこれからシーズンを迎える観光産業への影響も考えられることから、政府としてもできる限り早い段階での幕引きを図りたい考えだが、単なるパフォーマンスと言われないう、政権側にも歩みよりが必要だろう。

(金子研究員)